

太平洋横断から十五年――

今も鮮やかに波を切る 銅合金製ヨット「秋津洲Ⅱ世号」

父子二人だけの太平洋横断航海

一九八九年六月のある日、姫路港・木場ヨットハーバーは日頃にならない賑わいを見せていた。今をさかのぼること十五年前のことである。賑わいの中心は、全長十・二五メートル、幅三・三メートル、重さ約六トンのヨット「秋津洲 世号」。デッキには赤銅色に日焼けした父・松下紀生氏と息子・源君(当時十歳)がいた。テープと紙吹雪が舞う中、励ましと惜別の歓声を背に、ヨットはゆっくりと棧橋を離れていった。伴走のヨットやモーターボートをひき連れ港外へ。鳴門海峡、紀伊水道を抜けて太平洋へと出る。いよいよアメリカ大陸に向けた父と子二人だけの太平洋横断航海の始まりだ。

遠くを見つめ、なつかしいページを繰るように松下氏は言われる。

――あの航海は、息子とのふれあいの旅という大げさですが、そんな思いから始まったものです。四十五日間という行程なので、十歳の息子がどう乗り切るのが心配な面もありました。でも子供といつのは大したもので、狭いスペースで何か遊びを見つけ、それなりに楽しんでいただけです。遊びを作っていたのかもしれませんが、それでも出航後週間ほどは船酔いでひどく苦しんでいましたね。



松下紀生氏

夜は危険なので私がずっと

起きていました。

昼間何時間か見

張りを彼に頼み

私は寝るといっ

パタンの日が続

きました。肉体的

にはかなりシ

ンドかった。料理

担当は彼。私の

酒のつまみはも

ちろん、いろいろ

作ってくれまし

たよ。彼もそれ

なりに航海を楽

しんだようです。

六年生からカナ

ダの学校に入っ

たのですが、太平

洋横断航海をテーマにした授業を彼中心にやったようで

たちまち向こうで人気者になってしまったようです。

世界初のキューブロニッケル

(銅・ニッケル合金)製ヨット

松下氏(現・姫路工コテックス株(取締役会長)は、三十歳のとき、ヨットに魅せられて脱サラ、気象サービス会社を設立した。一念発起して自前のコンクリート製ヨット「秋津洲」を建造、仲間四人と世界一周へ旅立ったが途中で断念。しかし夢はさらに膨らんだ。オランダからヨットの設計図を買い、世

号の建造へと進む。その頃に出会ったのが、西嶋直道氏(古河電工(株)OB、当時金属事業本部・技師長)。松下氏は続けられる。――海洋生物の勉強会で西嶋



西嶋直道氏



陸上げされた秋津洲 世号



太平洋横断出航の日の賑わい



製造中の秋津洲 世号

した。ヨットは下が重い方がいいんです。西嶋氏が言葉が継がれる。

——当時海外の海水淡水化装置のヨットや配管にキプロロツケルを使用しており、その耐食性、強度には自信がありました。なにより海洋生物が付着しにくいんです。松下さんとお話するうちに、ヨットの船体に使うことをお奨めしたんです。近場のクルジングだとばかり思い込んでいたのですが、それで太平洋を横断してしまうなんて…今考えてみると冷や汗が出ます。でもそれだけキプロロツケルに自信を持っていました。ニメトル×ニメトルの大幅もありましたし、溶接技術も信頼性があったので、お奨めするとふたつ返事でオーケー。オーナー主導で事が進んだので建造に向けてスムーズに話は動いていきました。

一九八七年十月に製作がはじまり、翌年五月に、キプロ

ロツケル製ヨット(丸銅対ニツケルの割合)は進水することになる。その進水式に出席したあの堀江謙一氏に「こんな素材のヨットができるとは想像もできなかった」といわせている。

16年以上経て、今もかわらぬ姿・性能

キプロロツケルをヨット船体に使うのは世界初ということもあり、建造には衆智が集められた。当時このプロジェクトの推進役であった古河電工(株)金属カンパニー・大阪事業所生産技術部生産技術課主査・田中孝夫氏は当時の「苦労を振り返り」…

——当時FRPの船体にキプロロツケルの薄い条を貼る技術がすでに確立されており、何隻か就航していました。しかし五ミリ厚の大幅をどう曲げ、溶接していくか。設計図をいただきその検討を進めていきました。できるだけ溶接箇所を減らすため、型紙を作つて模索しました。曲げていくとどうしても部分的にヒズミが出てきます。加熱してたたく、通常「ヤイト」といいますが、これに対処しました。船体以外にも飲料水用のタンクにも使っています。

——タンクにキプロロツケル七(銅対三ニツケル)の割合を使うに当たっては、飲み水を入れるのですから、素材の耐食性や耐久性はもちろんのこと水の健全性がとても大事です。キプロロツケルと鉄のテスト水槽に小魚を入れ実験してみました。鉄は二日で赤サビが発生し魚は死んでしまいました。銅の抗菌性が生かされたキプロロツケル



キール部分の洗浄は水洗いだけ



デッキに設置されたソーラーパネル



船内の計器類



ヤイト跡の斑点が今も残る



7/3キプロロツケル製タンク



手前船壁にプロパンガス用銅配管が



田中孝夫氏

の方は、ずいぶん長く生きていたと記憶しています。と松下氏。

この秋津洲 世号は進水してすでに十六年が経っている。氏は百年はもつたらつと事もなげに言われる。眼前をゆつたりと航行する 世号は落ち着いた色合いを水面に映し、風格がただよい、実に美しい。十六年間活躍している船体は損傷もなく、表面状態もきわめて良好。進水直後の姿を今にとどめている。

松下氏は船を替え、秋津洲 世号で本年五月六日、世界一周に向けて旅立つた。今度は奥様二人のお嬢さんと。ちょうど今頃はインド洋上である。

